2021年9月5日　礼拝説教

「遠くて近い信仰者」⑧ハンナ　　サムエル第一 1:12-20

今まで旧約聖書に出てくる信仰者について学びを進めて参りましたが今回でひとまずシリーズを終えたいと思っております。「遠くて近い信仰者」というテーマははるか昔に生きた信仰者も現在の私たちが持つのと同じような悩み苦しみの中を通り、その都度神様の憐れみと恵みの中を過ごして来ました。永遠なる神様の御手の中で過ごすことにおいては昔も今も変わりません。その意味において遠い昔に生きた信仰者でありますがとても近い者であるという意味でそのテーマになりました。今回はシリーズの最後に一人の女性を取り上げます。その人の名はハンナです。ハンナという名前の意味は「恵み」です。日本なら「恵みさん」と呼ばれるところですね。彼女はアブラハムやモーセのようにイスラエルの民を導くといった大きな事業を成し遂げてはいません。むしろ、日常生活の中で神様に祈り、神様に取り扱われて歩みを進めた言わば「祈りの勇士」ともいうべきひとです。ハンナはどのようにして祈りに導かれ、どのような祈りをささげ、その祈りがどのように聞かれたのでしょうか。共に学んでゆきましょう。

１．ハンナの苦しみ

ハンナを祈りに導いたのは「苦しみ」でした。苦しみが無ければハンナはそれほど祈る人とはなっていなかったでしょう。ハンナの祈りを理解するために、彼女の苦しみを少し想像してみましょう。

ハンナには三つの苦しみがありました。

第一は、彼女が「第二夫人」であるということです。古代には、男性が戦争で命を落とすことが多く、男性が足りませんでした。また、女性がひとりで生計を立てて生活していけるような社会でもありませんでした。それで、裕福な男性は、夫人をふたり、三人と持つことがありました。そのような場合でも、夫は、どの妻をも平等に扱わなければならないと定められていたのですが、やはり、第二夫人はいろいろな点で、肩身の狭い思いをしたのです。どういういきさつで彼女が第二夫人となったかは分かりません。

ただ聖書で神は、アダムとエバを結ばれたときから、一夫一婦制を定めておられました。しかし、人類の中に罪が入ってきてからは、神の定めよりも、人間の便宜が優先され、一夫多妻制が生まれたのです。それは神の民、イスラエルの中にもありましたが、それは決して神のみこころではありませんでした。そして、神の定めに従わない結婚には、かならず、問題が生じ、その被害を受けるのは、きまって、ハンナのように弱い立場にある人たちだったのです。

ハンナの第二の苦しみは、こどもがなかったことでした。主イエスも、使徒パウロも、神のために独身を貫き通す人々を認めていますし、神父やシスターとなって伝道や教育、福祉の働きに携わっていることや、こどものいない夫婦が神のための働きに専念していたり、教会で良い奉仕をしていることはよく見たり聞いたりするところです。しかし、こどもがいることがそのまま神の祝福と考えられた古代では、こどもが与えられない女性は、神の祝福を失っていると考えられていたのは残念な事実でした。ハンナには「第二夫人」であるうえに「こどもを産めない」という苦しみがあったのです。

そして、第三の苦しみは、第一夫人ペニンナからの「いじめ」でした。その「いじめ」というのは、具体的な「いやがらせ」だけでなく、信仰的なものだったようです。6節に「彼女を憎むペニンナは、主がハンナの胎を閉じておられるというので、ハンナが気をもんでいるのに、彼女をひどくいらだたせるようにした。」とあります。夫エルカナは毎年、家族そろって宮もうでをしていました。このとき、ペニンナはハンナに、こう言ったかもしれません。「あなたには、宮もうでをする資格なんかない。神は、あなたを嫌って、子どもを授けないのだから。宮もうでをして祈っても、神はお聞きにならない。」ペニンナは、子どもが生まれないことで、ハンナに神を恨ませようとしました。ペニンナはハンナにとっての最後

のよりどころである「信仰」を攻撃してきたのです。

ペニンナは信仰の人ではなく、女性としての優しさや、人間としての思いやりに欠けていました。「弱い者いじめ」という最も卑劣なことが、古代から現代までも続き、神の民の中にさえあったのは悲しいことです。神を信じる者は、たいていのことには耐えられます。無理解な人やわがままな人からひどい扱いを受けたとしても、神に頼って乗り越えることができます。イエス様のように「あの人たちは自分のしていることや自分の言っていることが分かっていないのです。赦してあげてください。」と言えるかも知れません。しかし、いちばんつらいことは、神を信じるという人たちが、神を恐れて生きることを軽んじ、神とのまじわりを熱心に求めることがないことです。そればかりでなく、そうしたことに対する反抗的な言動がなされることです。旧約時代の信仰者たちは、そのような苦しみを体験しましたが、世の終わりが近づくにつれて同じことが教会の中で繰り返されると預言されています。わたしたちも目を覚まし、そうしたものに負けないものを持っていたいと思います。

２．ハンナの祈り

ハンナはこの苦しみを「祈り」によって神のもとに持っていきましたが、神を知らない人は、苦しみを解決する方法を知りません。仏教は苦しみを見つめることによって生まれた宗教で、(つまり悟りですね)日本人は仏教の背景を持っているといいながら、こんにちでは苦しみに向かい合うことをしなくなりました。多くの場合、苦しみを紛らわせているだけで、ほんとうの解決にはなっていないのです。

心に悩みを抱えている人は、現代であれば、カウンセラーのところに行くでしょう。もし、ハンナが現代のカウンセリングを受けたとしたら、カウンセラーはハンナに、「苦しみを紛らわすために何かの楽しみを見つけなさい」とアドバイスすることでしょう。しかし、一時的に気を紛らわせても、それが過ぎれば、苦しみが何倍にもなって返ってくることを、わたしたちは知っています。

ハンナの夫エルカナは毎年、神の宮に行って礼拝をささげていました。しかし、その「宮もうで」も、彼女を癒やすことはありませんでした。神の宮で礼拝をささげる、それは神の民に命じられた聖なる義務であり、喜ばしい特権でした。しかし、「宮もうで」が、「信仰」の行為にならず、たんなる宗教行事となっているだけなら、それもまた、人の苦しみを癒やすことはできないのです。ハンナが一番つらかったのは、じつに「宮もうで」の時でした。

食事の間も泣きくれているハンナに、夫エルカナは優しい言葉をかけ、彼女を慰めています「ハンナ。なぜ、泣くのか。どうして、食べないのか。どうして、ふさいでいるのか。あなたにとって、私は十人の息子以上の者ではないのか。」(8 節)。しかし、その言葉も思いやりもハンナの涙をぬぐうことはできませんでした。そうですね。この言葉は結局は「心配している私の気持ちを汲んでくれよ」というものであり、時々男性は事の本質を理解できないで自分勝手なことばをかけますね。わたしたちは、苦しむとき、人の励ましや慰めを必要とします。しかし、人の励ましや慰めも解決できないことが多くあるのです。

もし、ハンナに信仰がなかったら、こうした苦しみに押し潰されたままだったでしょう。主の宮に上らず、家に閉じこもっていたでしょう。しかし、ハンナには信仰がありました。それで、苦しみは彼女を押し潰すものではなく、彼女を祈りへ導くものとなったのです。

では、ハンナはどのように祈ったのでしょうか。10 節に「ハンナの心は痛んでいた。彼女は主に祈って、激しく泣いた。」とあります。食事の時に泣き続けていたハンナは、主の宮ではもっとはげしく泣いたのです。神の前だから、とりすました祈りをしようとは考えませんでした。ハンナは自分を苦しめているもののすべてを嘆き、その思いを神の前にぶちまけたのです。

ハンナの祈る姿に目を留めた祭司エリは、ハンナが酒に酔っているのではないかと思い、「いつまで酔っているのか。酔いをさましなさい」（14 節）と言いました。それに対するハンナの答えは「いいえ。・・私は主の前に、私の心を注ぎ出していたのです」（15 節）でした。「主の前に」「心を注ぎ出す」祈り。すべてをご存知の神の前に、「よそいき」の祈りは通用しません。プライベートな祈りの時には、あるがままの自分をさらけ出し、神にすべてをさらけ出す祈りをしていいのです。

３．ハンナの救い

ハンナの祈りは、神に聞かれました。神は、祈りに聞いてくださるお方です。とくに苦しむ人の祈りに。詩篇に「この悩む者が呼ばわったとき、主は聞かれた。こうして、主はすべての苦しみから彼を救われた。」（詩篇 34:6）「苦しみのうちに、私が主に呼ばわると、主は私に答えられた」（詩篇 120:1）とあります。これはまさにハンナの祈りにそのままあてはまります。神は、苦しみの淵から叫び求める祈りを聞いてくださるのです。その祈りに答えて、救いを与えてくださるのです。

ここに、苦しみの解決があります。さきほど、「仏教は苦しみを見つめることから生まれた宗教である」と言いました。聖書も同じように、わたしたちに苦しみから目をそらしてはいけないと教えています。しかし、聖書は、同時に、わたしたちを苦しみから救ってくださるお方を仰ぎ見るように教えています。仏教には、一言では言い表せない深い教えがありますが、最終的には、人を苦しみから救うのは、その人自身なのです。しかし、聖書は、人を苦しみから救ってくださるお方、神がおられると言います。聖書は、わたしたちの苦しみをすべて引き受け、わたしたちにかわって、その苦しみを苦しみ抜いてくださった救い主を教え、指し示しているのです。

苦しむ者のところにまで降りてきて、苦しむ者をそこから引き上げてくださるお方、自ら傷つき、わたしたちの傷を癒やしてくださるお方、これが、わたしたちの神、イエス・キリストです。わたしたちは、このお方に祈るという大きな恵みをいただいているのです。

祭司エリは、祈り終えて顔を上げたハンナに「安心して行きなさい。イスラエルの神が、あなたの願ったその願いをかなえてくださるように。」との祝福を与えました。「安心して行きなさい。」主イエスも、この言葉を何度も語っておられます。「大丈夫だから。私が一緒にいるから」祈りの中でこの言葉を聞き、立ち上がることができる人、いや、この言葉を聞くまで祈り続ける人は幸いです。

神に祈り、神からの平安を受けたハンナは一変しました。18 節に「それからこの女は帰って食事をした。彼女の顔は、もはや以前のようではなかった。」とあります。祈りの前と後の大きな変化に目を留めたいと思います。信仰の祈りは、祈る人の心を変え、その人を変え、また物事を変えるのです。祈りが影響してゆく順序が大切です。祈れば物事や他の人が変わり、私の心が落ち着く。これは私は変わらないけれど、周りが変わってくれるようにという自分本位の祈りです。そうするといつまでも「私を悲しませるようなことは言わない様に、しないように」と周りに叫び続けなければなりません。叫ぶのが大変なら逃げ回らなければなりません。あなたが変われば周りは変わるのです。

ハンナはこのあと、男の子を産み、この男の子がイスラエルの偉大な指導者サムエルとなりました。ハンナの祈りは、ハンナを救い、彼女の祝福となったばかりでなく、イスラエルの救いとなり、祝福となったのです。わたしたちも、祈りが自分だけでなく、多くの人の救いとなることを信じ、ハンナにならい「祈りの勇者」になりたいと思います。